言葉を「語る」ことに関する一考察
―一人の重度・重複障害者との関わりから学ぶ―

A Case Study of a Profoundly Retarded Person
― A Consideration about Speaking Words ―

遠　藤　　司
Tsukasa ENDO

目　　次

はじめに
Ⅰ　対象者：ヨシヒサくんについて
Ⅱ　関わりの場面におけるヨシヒサくんの姿の記述
Ⅲ　メルロー＝ポンティの言語論に学ぶ
Ⅳ　考察
おわりに

はじめに

本論文は、ある一人の障害の重い人：ヨシヒサくんとの教育的関わりを基にした実践的事例研究である。本事例研究では、関わりの場面の中でも「言葉」をテーマとした場面を取り上げ、彼が言葉を出すに至る過程でおこっていたことを明らかにするとともに、「言葉」を出すことの彼にとっての意味にまで考察を進めることとなる。

筆者は、重い障害をもつ方々と関わりの場面を積み重ねてきた中で、彼らが長い年月をかけて言葉を出すに至る姿を数例見ることができた。彼らは、不自由な身体を懸命に動かして文字を書いたり、50音表を指さして文字を選んだりして言葉を出していた。筆者は、彼らがはじめて言葉を出す度に、関わり手としての大きな喜びを感じ、それほどまでにして彼らが言葉を出そうとすることの意味を常に考えさせられていた。

言葉を出すことができるようになる過程を、言葉を出すことができる能力が備わる期間ととらえ、そのために行うべきことを行うことも、関わり手の責務である。さらに、言葉を出すことが彼らに何をもたらすのかを明らかにし、言葉を出すことの意味について、関わりの場面での彼らの姿から学び明らかにすることも、関わり手の重要な責務である。本事例では、「ぬく」という、極めて特徴的な、ヨシヒサくんにしか出すことのできない言葉が語られた。筆者は、「ぬく」という言葉を語った時に彼が生きていた世界を明らかにするために、彼が、あるいは人間が言葉を出すことの意味を明らかにすることも含めて、考察を深めていかなければならなくなったのである。

以下、彼が言葉を出すに至る過程の中で何がおこっていたのか、言葉を出すことがいかにして可能となったのか等の視点をもちながら、本論の考察をはじめていくこととしたい。

Ⅰ　対象者：ヨシヒサくんについて

本事例研究の対象者は、1984年生まれの男性：ヨシヒサくんである。筆者は、1992年、当時７歳であった彼と出会い、以後、彼との関わりの場面を現在まで積み重ねてくることができた。本論文で主題とする関わりの場面：2013年８月の時点までに、筆者は彼と約20年に渡り、年に一回ないし数回のペースで関わりを継続してきた（注１）。

関わり当初の彼は、仰向けで、あるいは横向きで寝たきりの状態であり、自ら身体を動かしたり移動したりすることはほとんどなく、日常生活は全面的な介助が必要であった。筆者は、彼が自らの意志と工夫をもって身体運動をおこすことができるような「教材」を呈示する仕方で関わりを行ってきた。彼は、自身が好む教材に対しては、極めて意欲的に取り組み、自らの姿勢を保ちながら、つかんだものを

枠や棒の方向に沿って動かしたり、枠からものを抜き取ったり、つかんでいるものを入れ物に入れたりといった身体運動をおこすことができるようになった。筆者は、彼がおこすことのできる身体運動を見極めながら、その都度適切な教材を呈示し続けた。その結果、彼は、形や大きさの選択等、概念形成をテーマとした課題にも取り組むようになり、ついには言葉をテーマとする課題にまで取り組むようになったのである。以下、2010年以降の、言葉をテーマとする関わりの場面での彼の姿を記していくこととしたい。

Ⅱ　関わりの場面におけるヨシヒサくんの姿の記述

1　2010年・2011年の関わりの場面でのヨシヒサくん

1992年に出会って以来、ヨシヒサくんとの関わりを積み重ねてきた私（注２）は、関わりのテーマを概念形成から言語表現へと拡げ、彼に適した方法を考えつつ言葉を出すことを促すようになった。例えば、パソコンのワープロソフトを用いて、50音表に沿って、一行ずつ、一文字ずつ彼に文字を呈示していき、彼が何らかの反応を示した時にその文字を選択するという課題を行った。はじめは、筆者の呈示した言葉（例えば彼の名前）を作るよう促し、それぞれの文字を選ぶという課題として行った。彼は、時には明確に呈示された行（例えば「よ」ならばや行）を選び、そこから文字（や・ゆ・よの中から「よ」）を選んでいた。私が彼の手を握ってあ行から順に呈示していき、彼が私の手を握ったり身体を動かしたり表情を変えたりした時に、それを選んだと判断したのである。この時点で私は、彼に対して、50音表で文字を順に示したり、文字の形や順序等を示したりするなどして、50音の文字を体系的に教えることをしてはおらず、この場面は、学習の一場面というよりも遊びの場面としてとらえていた（注３）。

2010年８月の関わりの場面で、彼は、はじめてこの方法で言葉を作り、その言葉をひらがなの文字で書いた。この時彼は、私がワープロソフトで一文字ずつ呈示していったところ、時には手をビクッと動かしたり、目を大きく見開いたり、表情を変えたりするなどして、私の見る限りでは明確な反応を示した。例えば、彼は、私がワープロソフトであ行から順に行単位で呈示していったところ、「な行」のところで明確な反応を示し、さらに、な行の文字を一文字ずつ呈示していったところ、最初の「な」の文字で明確な反応を示した。彼は、「な」の文字を選択したのである。以下同様に文字を一つずつ選んでいき、長い時間をかけながらも、彼は一つの言葉を作り、さらに作った文字をひらがなで書くことまでしたのである（注４）。この時私は、彼が、文字を一つずつ重ねることにより意味のある言葉を出すことができることを確信できた。この後、ワープロソフトを用いて文字を一つずつ順に選ぶという方法を中心に言葉を出しやすい彼なりの方法を考えながら、自分の言葉を出すことを促すよう努めることとなった。

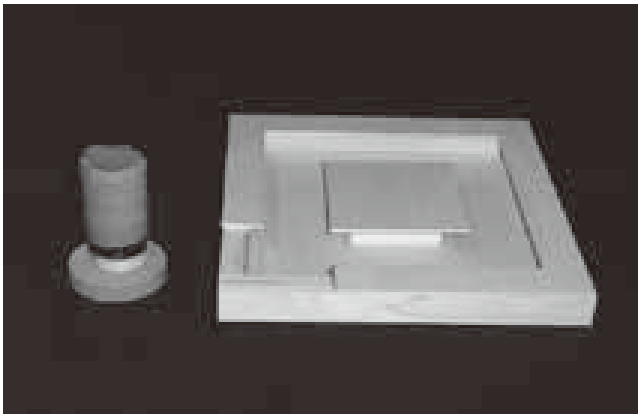

図１　教材図：四角の枠抜き

しかし、2011年８月の関わりの場面では、前年と同じワープロソフトを用いて言葉を作るよう促したものの、彼は明確な反応を示すことはなく、最後まで言葉を作ることはなかった。そこで私は、寝た姿勢でいた彼の体を起こし、四角の枠抜きの教材（図１）を呈示することを提案した。この教材は、彼との関わりの場面で1997年より用いていたもので、彼が極めて熱心に意欲的に取り組んできたものであった。言葉を出す課題が成立しなかったこの状況においても、この教材ならば、彼の意欲を引き起こすことができるのではないかと私は考えたのである。私が彼の体を後ろから支えるようにして、彼と一緒に座る体勢を作り、彼の前に四角の枠抜きの教材を呈示した。すると彼は、極めて意欲的に身体を動かし、四角の枠の中にある取っ手を抜き取ろうとした。ワープロソフトで文字を一つずつ呈示されていた時

の表情とは全く異なり、彼は生き生きとした表情を示し、極めて意欲的に身体を動かして取っ手をつかみ動かそうとした。私が支えていないと体を起こす姿勢を保つことはできないのであるが、その中で懸命に自らの身体を動かし、取っ手を動かし、抜き取り口で取っ手を横に倒したり、上に浮かしたりして、しっかりと取っ手を枠から抜き取るという行為を完結させていた。彼のこの様子を見て、私は、枠抜きの教材で取っ手を枠から抜き取るという行為が、彼の中に意味のあるものとして根付いていることを改めて確信できた。

しばらくの間枠抜きの教材を行った後、私は、「しかく」という文字を書くことを彼に提案した。彼は私に手を添えられながらではあるものの、ペンを持ち、「しかく」というひらがなの文字を紙に書いた。この日の関わりにおいて、パソコンのワープロソフトで言葉を作ることはなかったものの、彼が、四角の枠抜きの教材に対する変わらぬ高い意欲をもっていることと、私に支えられながらではあるものの文字を書くことができるようになってきていることを、改めて確認することができた。これらのことを基にして次回の関わりをどのように作っていくかを、私は考えなければならなくなったのである。

2　2013年の関わりの場面でのヨシヒサくん

2012年は、ヨシヒサくんが体調を崩して長期入院をしたため、関わりの場面をもつことはできなかった。この入院の後、呼吸機器等の医療機器が常時必要な状態となったため、体を起こす等、彼の姿勢を動かすことは極めて困難なこととなり、身体運動そのものも、制限がかかることとなった。しかし、2013年８月、彼と２年ぶりに関わりの場面をもつことができた時、彼は、はじめてひらがなの文字を書くことにより、意味のある言葉を自ら出したのである。以下、この場面での彼の様子を詳述していくこととする。

右横を向いた横向きの姿勢で、若干顔を上に向けるようにしている彼に対して、私は、上になっている左手を握って、何をやりたいかを彼に問うた。私は、「パソコンで言葉を作りますか、ペンを持って書きますか、四角の枠の抜くのをやりますか、それとも寝ますか」と問いかけた。「枠の抜くのをやりますか」と問いかけられたときに、彼は私の手を握って反応したように私には見えた。私は、「じゃあ、枠抜きをやりましょうか」と言い、四角の枠抜きの教材を呈示した。

2011年の関わりの場面で行ったような姿勢を、すなわち、私が彼の体を支えて体を起こした姿勢を作ることは不可能なので、寝た状態のままでいる彼に対して、彼の左手が動かせる位置に枠抜きの教材を呈示した。私が彼の左手をとり、枠にはまっている取っ手をつかませ、抜き取り口の穴のところまで動かすようガイドした。すると彼は、取っ手をしっかりと自分でつかみ、枠の方向に沿って動かし、角をしっかりと曲がって穴のところまでもっていき、そこで手の動きを止め、しばらく考えるようにしてから、取っ手をゆっくりと倒していき、枠から取っ手を外した。この間、彼の表情は極めて真剣なもので、今まで幾度となくやってきたこの教材に対して、変わらぬ、あるいはそれ以上の意欲をもって取り組もうとしていることが私に伝わってきた。彼は数回取っ手を枠から抜き取ったが、取っ手を穴のところで倒すこともあり、また、取っ手をつかんだまま穴から浮かして上に抜き取ることもあった。取っ手をつかんでいる左手に力を入れるだけではなく、全身に力を入れるようにして、少し全身を揺らしながら、極めて一生懸命に取っ手を抜き取ることに取り組んでいたのである。

ひとしきり取っ手を抜き取る身体運動を行った後、私が、「せっかくこれだけ四角を抜いたのだから、『しかく』と作ってみようよ」と提案した。「『しかく』と書くか、ワープロで『しかく』と作るか、どちらがよいですか」と彼に問いかけたところ、彼が「ワープロ」の方で少し反応を示したように私には見えた。そこで私は、ワープロソフトでいつものようにあ行から順に文字を呈示していった。「しかく」と作るのであるから、さ行で反応し、かつ、その中の「し」で反応してほしいと私は考えていた。しかし彼は、いずれの行にも特段の反応を示すことはなく、次々と呈示される５文字ずつの音声をじっと聞いているようではあるが、若干の戸惑いの表情を浮かべているようにすら私には見えた。

そこで私は、「しかく」の文字を紙（スケッチブック）に書くことを改めて提案した。2011年８月に、私と書いた彼の「しかく」の文字をよく見せ、私が読みながら手でたどったり、彼に手でたどらせたり

した。私は、彼に、ペンを左手でつかませ、彼の顔の前あたりに紙を立てて置き、左手でその紙の上に書くよう促した。まず、私が彼の手をとって、「しかく」と一文字ずつ空書し、改めてどのような形の文字であるかを確認させた。文字を確認している間、彼は、より真剣な表情となり、また、全身に力を入れているようであった。この後彼は、私に手を添えられた状態で、一文字ずつ書いていった。寝た状態で立てられた紙に書くのであるから、上から下への縦線は比較的書きやすいのであるが、左から右へ、あるいは右から左への横線や、途中で曲がったり丸めたりする線を書くことは容易ではない。しかし彼は、いずれの線についても、書き始めると全身の動きを止め左手の動きに集中させるようにして、一つ一つの線をしっかりと書き進めていき、「しかく」と書ききったのである。この間、私は、彼の左手を支えながらも、彼が、私の指示に従うのではなく、ほとんど自分の意志で書くべき方向を選択し、文字を書いていたと感じていた。私は、適切な状況と支えさえあれば、彼が自らの意志と力でひらがなの文字を書くことができることを確信し、さらに、自らの言葉をも書くことができるのではないかと考えたのである。

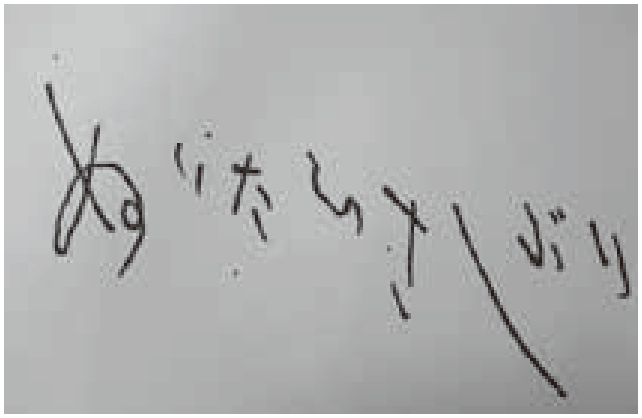

図２　ヨシヒサくんの書いた言葉（１）：ぬいたひさしぶり

私は彼に、「四角を抜いてどうでしたか」と問い、答を自ら言葉として書くよう提案した。私が彼の左手にペンを持たせようとすると、彼は自ら力を入れてペンを持ち、書く体勢になった。私が彼の手をとり、紙のところまでもっていくと、彼は手を少し上にあげてきた、そこからまず縦線を書き、さらにそれを囲むように丸い線を書いて、「ぬ」の文字を書いた。私は、彼が自ら「ぬ」の文字をしっかりと書いたことをうけて、彼自身の言葉が作られることを改めて確信することができた。彼の書いた「ぬ」が予想よりも大きな文字であり、大きく書くのは身体運動的にも彼に負担が大きくなってしまうのではないかと考え、「もう少し小さな文字でも大丈夫だよ」と伝えた。彼は、「ぬ」の隣に、少し小さく縦線を二本引いて「い」を書き、さらに、その隣に、横線と縦線を組み合わせて「た」を書いた。つまり彼は、「ぬいた」と書いたのである。私は、「抜いてみてどうでしたか」と問うたのであるが、それに対して彼はまず、「ぬいた」と答えたのである。

私は、彼の言葉はここで終わったのかと思い、「これで終わりだったら手を上げてください」と彼に言った。しかし、彼は、手を上げることはなく、ペンを放そうともせず、むしろ紙にペン先をつけてさらに書くことを続けようとしているように私には見えた。私は、そのままの状態で、彼の動きを待つこととした。すると彼は、横線を引いた後に下に曲げて丸い線を引き、「ひ」の文字を書いた。続けて彼は、「さ」、「し」、「ぶ」と書き進めていった。つまり彼は、「ひさしぶ」という言葉を書いたのである。ここで彼は、疲れたのか、表情が緩み、手の力も抜けそうになった。私が、「書きたい言葉はわかったけど、もう一文字いるでしょう、頑張って書いてみて」と励ますように言うと、彼は私のガイドを受けながら、縦線を二本引いて「り」の文字を書いた。つまり彼は、「ぬいたひさしぶり」という言葉を書いたのである。

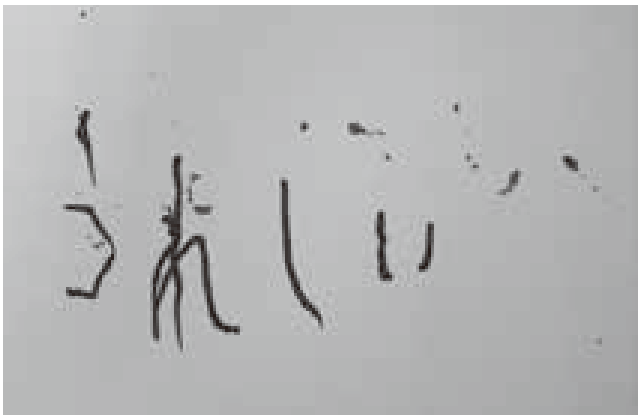

図３　ヨシヒサくんの書いた言葉（２）：うれしい

私が、「ひさしぶりに抜いてどうだった、この姿勢で抜いたのは初めてだったけど」と再度彼に問いかけ、感想を示す言葉を出すよう促した。私が、「ど

うだすごいだろ」とか、「うれしかった」とか、「ねむかった」等の選択肢を彼に示し、彼の言葉を待った。彼にペンをもたせて彼の動きを待ったところ、彼は、一度身体全体を震わせるようにした後、真剣な表情になり、線を一つずつ引き出し、一文字ずつ書き出した。彼は、「うれしい」と書き、そこで手を上げるようにして書くことを止めた。この間、彼の表情は真剣なものであり続け、極めて深く考えながら、必ずしも自由には動かない自らの身体を懸命に動かして一文字ずつ書き進めていった。あまりに真剣すぎたのか、途中で少し眠くなったり気が遠くなったりするような表情を示すこともあったが、私のガイドを受けながら、彼は最後まで自分の言葉を書ききってくれたのである。

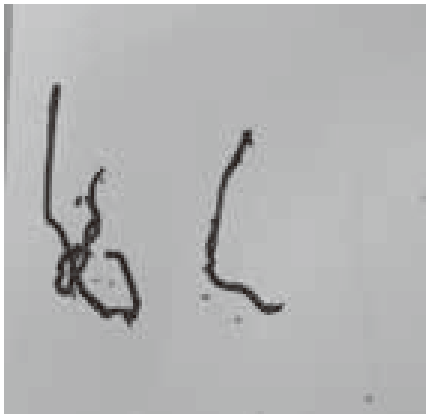

図４　ヨシヒサくんの書いた言葉（３）：ぬく

少し休憩した後、再び彼にペンを持たせ、「今自分が思っていることでもいいし、次にやりたい勉強でもいいし、考えがまとまったら書いてください」と言い、彼の言葉を待つこととした。しばらくした後、彼は、縦線をしっかりと力強く書き、その縦線にからめてまるめるような曲線を書いた。私は、この時点では彼が何の文字を書いたかがわからなかったが、彼が次の文字を書こうとして手を動かしたので、その動きにしたがって、彼が文字を書くことを待った。すると彼は、縦線を曲げるようにして書き、明らかに「く」の文字を書いて、この時点で書くことを止めた。彼が「く」と明確に書いた時点で、先の文字が「ぬ」であることに思い至った私は、彼に、「『ぬく』と書いたのかな。また抜く勉強をしたいのかな」と問うと、彼は、表情を変え、身体に力を入れて答えたように私には見えた。私は、「じゃあ、抜く勉強をやろう」と言い、三角の枠抜きの教材を呈示した。この教材についても、四角の枠抜きの時と同様に、彼は、寝た姿勢のままでしっかりと取っ手をつかみ、枠の方向に沿って動かして、角を曲がって抜き取り口の穴のところで抜き取るということを行った。何度も集中して全身に力を入れてしっかりと取っ手を動かし、指先だけが取っ手に触れている状態になっても何とかして穴から取っ手を抜き取ろうとしていた。さらに私が、「もう一度四角を抜いてみようか」、「このまま三角をやろうか、それとも四角をやろうか」と問うと、彼は、四角の時に明らかに左手を動かした。再度四角の枠抜きを呈示したところ、彼はこの時も懸命に自らの身体を動かし、取っ手を抜き取り口の穴から取り出すための身体運動をおこしていた。彼の真剣さや高い意欲を見て、私は、この教材を呈示した時からの彼の姿を思い返しながら、「ずっとやってきたからね」と、思わず彼に語りかけていた。

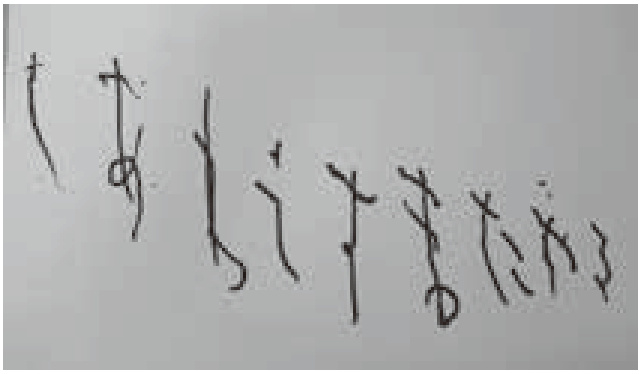

図５　ヨシヒサくんの書いた言葉（４）：しあわですまたやる

最後に私は、この日の関わりの感想を書くよう彼に提案した。私が、「最後に今日の感想を書こうと思いますがどうですか、それともこのまま終わりにしますか」と問うたところ、彼は、私の、「書いてくれていいですか」の言葉に明確な身体の動きで反応した。そこで私が、「２年ぶりに勉強できてうれしかったです、私の感想を先に伝えておきます、元気そうで安心しました、抜くのすごいね、抜くのをこんなにやってくれるのはうれしいです」と、自身の感想をまず述べて彼に伝えた。その上で、「今日の感想はどうでしたか」と彼に改めて問いかけた。

彼に再びペンをもたせ、紙の位置と縦線、横線の方向を示した上で彼の動きを待った。彼は、少し疲れてきた様子で、手を上にあげるのも難しそうであったが、それでも動かすことのできる範囲で懸命

に文字を書き進めていった。彼は、途中何度か休みを入れながらも、「しあわです」という言葉を書いた。つまり彼は、「せ」の文字を抜かしたものの、「幸せです」と書いたのである。「ここで終わりですか」と問うたところ、彼はさらに書き進め、「またやる」と書いた。彼は、「しあわですまたやる」という言葉を書ききってくれたのである。この間、彼は、疲れた様子を見せていたので、私は何度か、「もういいかな、ここで終わりにしようか」と言ったのだが、彼は私の言葉を振り払うように、ペンを持つ手にさらに力を入れて、最後まで自らの思いを表す言葉を書いたのである。彼は、この言葉を最後まで書ききった後、そこで初めて身体の力をゆるめ、満足そうな表情で手を下していき、ここでこの日の関わりは終了となった。

私は、久しぶりに彼との関わりの場面をもてたことの喜びを感じると同時に、彼がはじめて自らの言葉を書いたことに対して、若干の驚きとともに大きな喜びを感じていた。彼の言葉は、「ぬく」という言葉に象徴されるように、積み重ねてきた関わりの場面から出てきたものであることを確信することができた。さらに、「しあわ（しあわせ)」という言葉を見ることにより、私は、関わりの相手として極めて大きな喜びを感じることができた。ワープロソフトを用いて言葉を出していた場面と比して、ひらがなの文字を書いた場面での彼は、より積極的であり、真剣であったように私には見えた。言葉を出すための彼にとっての適切な方法を考えてきた私にとって、この日の関わりの場面における彼の姿は、改めて多くのことを考えさせられるものであった。

以上、2010年、2011年、ならびに2013年の関わりの場面におけるヨシヒサくんの姿を記してきた。特に、2013年の関わりの場面において、彼がしっかりと明確に書くことにより自らの言葉を出す様子を初めて見た私は、何としても自らの言葉を書ききるのだという彼の意志の強さを改めて感じたのである。彼のこの様子を見て、私は、彼が言葉の世界を生きていることを確信するとともに、彼の生きている世界を明らかにするためには、彼が出した言葉の意味を、そこに至る過程を含めて深く考察しなければならないと考えた。以下、「言葉を語る」という視点から、彼の生きている世界を解明すべく、考察をさらに進めていくこととしたい。

Ⅲ　メルロー＝ポンティの言語論に学ぶ

1　「語る言葉」と「語られた言葉」

2013年８月の関わりの場面で、ヨシヒサくんは、「ぬいた」、「ぬく」という言葉を、確かに自ら書いた。先述のように、筆者は、1997年より、四角等の枠抜きの教材を彼に呈示し、彼は枠の中の取っ手をつかみ動かし、抜き取り口の穴の所から抜き取ってきた。この間、筆者は彼に、「抜いて」、「抜こう」、「抜けたね」等の言葉をかけ、彼は、これらの言葉を聞いていた。彼と筆者の関わりの場面で、「ぬく」という言葉は、長年に渡り頻繁に使われてきた言葉であった。だからこそ、彼は、「ぬく」という言葉を認識し、それを自らの言葉として書くことができた。つまり彼は、「ぬいた」、「ぬく」という言葉を既にもっていたと考えることができるのである。

「言葉を既にもつ」とはどのようなことなのであろうか。この問題について考えることは、彼の生きている世界を明らかにするために極めて重要なことであると考えられる。ここで、言語の発生の過程について思索を深めたメルロー＝ポンティ（注５）の言語論に添って、この問題の考察を進めてみたい

メルロー＝ポンティは、著書『知覚の現象学』の中の言語について論じた部分において、次のように述べている。

「手もちの意味、つまり過去の表現行為の集積が、語る主体たちのあいだに一つの共通の世界を確立しており、現在使われるあたらしい言葉がそれに依拠することは、あたかも所作が感性的世界に依拠するのとおなじことである。そして、言葉の意味とは、その言葉がこの［共通の］言語世界を使いこなす仕方、あるいはその言葉が既得の意味というこの鍵盤のうえで転調する仕方、以外の何ものでもない」（メルロー＝ポンティ、1967、306：下線強調は筆者による）

「あらゆる表現操作のうちひとり言葉だけが、沈殿作用をおこして一つの相互主観的な獲得物を構成することができる」（同上、311：下線強調は筆者による）

「言語（langages)、つまり構成された語彙ならびに統辞の体系、経験的に存在している〈表現手段〉

は、言葉（parole）の行為の寄託物であり沈殿物」である（同上、321：下線強調は筆者による）

これらの記述の中で記されている、「過去の表現行為の集積」、「既得の意味というこの鍵盤」、「沈殿作用」、あるいは「沈殿物」とはどのようなことを意味しているのであろうか。メルロー＝ポンティはここで、われわれが発した言葉は、その場限りで消えるものではなく、既得の意味をもつものとして自身の中に集積され、一つの世界を形成すると述べている。さらに、語る主体であるわれわれがもつ世界は、一つずつが独特で独立して他とまじわらないものではなく、共通の世界であって、その世界に依拠しつつ言葉は発せられるとも述べる。そして、発せられた言葉が既得の意味として自身の中に集積されることを、メルロー＝ポンティは、「沈殿」とよんだのである。

メルロー＝ポンティは、さらに、「語る言葉（parole parlante）と語られた言葉（parole parlée）という区別を立てることもできるかもしれない」（同上、321）。と述べ、今まさに発せられている言葉が「語る言葉」であり、それに対して、それらが沈殿され、既得の意味となって共通の世界を形成するものとなった言葉を、「語られた言葉」であることを示した。つまり、「語る言葉」とは、「語られた言葉」が沈殿された結果できあがった共通の世界からあらわれるのであり、「語る言葉」が語られたならば、それは「語られた言葉」として沈殿し、共通の言語世界を形成するのである。

では、言葉が語られたならば、それらは全てが語られた言葉として沈殿され、既得の意味として共通の世界を形成するに至るのであろうか。どのような言葉が沈殿され、また、どのような言葉は沈殿されずに消えゆくことになるのであろうか。この問題について、さらに考察を進めてみたい。

2　成功したコミュニケーション

メルロー＝ポンティは、『知覚の現象学』の後の著書『世界の散文』の中で、「語る言葉」と「語られた言葉」についての考察をさらに進め、次のように述べている。

「あえて言えば、二つの言語があるのだ。事後の言語、習得され、そして自分がその担い手となった意味の前では姿を消してしまう言語と、表現の瞬間に形成されつつあり、まさに私を記号から意味へと滑りゆかせようとする言語、つまり話された言語（langage parlé）と話している言語（langage parlant）とがそれである」（メルロー＝ポンティ、1979、27）

さらにメルロー＝ポンティは以下のようにも述べる。

「完成された表現という観念自体が根拠のないものであって、われわれがそのように呼んでいるものは、成功したコミュニケーションなのである。だが、コミュニケーションが成功するのは、聞き手が、言葉の連鎖を一つ一つ辿る代りに、他者の言語学的所作を自分のものとして捉え直し、みずから遂行することによってそれを超出する場合のことでしかないのである」（同上、48：下線強調は筆者による）

どのような言葉が沈殿され、既得の意味として共通の世界を形成するのかという問題について考える時、メルロー＝ポンティがここで述べている、「成功したコミュニケーション」という言葉は極めて重要であると筆者は考える。

この問題について、メルロー＝ポンティの言語論を考察した河野哲也の論に学びつつ、さらに考えていきたい。

河野は、以下のように述べている。

「語る言葉が何らかのメッセージを描き出そうとしている最中の言葉であるなら、語られた言葉とは、表現行為が一旦成功し、その言葉が意味するものを確実に描き出すようになり、以後、既定の表現としてわれわれが反復的に用いるところの言葉である。したがって、語られた言葉とは意思伝達に成功した既存の表現であり、創造的表現の基盤となるような言語的沈殿物と考えることができる」（河野、2000、55-56：下線強調は筆者による）

「語られた言葉も最初は語る言葉であった。語る言葉が表現に成功すれば、言葉と意味とが合致する。そうなると、一度成功した表現はいつでも使用可能な獲得物として主体のうちに保持される。こうして語る言葉は語られた言葉となるのである。そして、主体のうちに沈殿した語られた言葉は、新たな発話においては語る言葉としてふたたび取り上げ直される。ここには語る言葉から語られる言葉へ、そしてふたたび語る言葉へという螺旋状の過程をみることができる」（同上、98：下線強調は筆者による）

ここで河野が述べている、「意思伝達に成功した既存の表現」、あるいは、「成功した表現」とは、先に記した、メルロー＝ポンティの「成功したコミュニケーション」という概念と重なると筆者は考える。意思伝達に成功して既存の表現となったものが、「創造的表現の基盤となるような言語的沈殿物」になるのであり、「語られた言葉」となるのである。すなわち、「語る言葉」のうち、コミュニケーションに成功した言葉が、あるいは、意思伝達に成功した言葉が、語られた言葉として沈殿し、共通の言語世界を形成することとなるのである。さらに、その言語世界から、新たな言葉が語る言葉として語られ、それらが意思伝達に成功すると、さらなる語られた言葉として沈殿し、新たな共通の言語世界が形成されることとなる。この関係を、河野は、「螺旋状の過程」とよんだのである。

以上、メルロー＝ポンティの言語論における、語る言葉と語られた言葉の区別の意味を、さらに、語る言葉がコミュニケーションに成功することにより沈殿され語られた言葉となることの意味を読み取ることができた。語る言葉のうちでも、コミュニケーションに成功したもののみが沈殿され語られた言葉になるということについて、ここで改めて考えなければならない。そもそも、コミュニケーションが成功するとはどのようなことなのであろうか。「意思伝達」という言葉に象徴されるように、自らの意思が相手に伝われば、それをもってコミュニケーションが成功したといえるのであろうか。このことについて考えなければ、語る言葉のうちでもどのような言葉が沈殿して語られた言葉になり、どのような言語世界を形成することになるのかを明らかにすることはできない。以下、メルロー＝ポンティの思索に依りながらさらに考察を進めてみたい。

3　互いの世界を侵蝕する

メルロー＝ポンティは、『世界の散文』の中で、言葉が通じ合うことについて、以下のように述べている。

「言葉（パロール）という特殊な所作に関して言うなら、その解決は、対話の経験においては他者の言葉（パロール）がわれわれのうちでわれわれの意味に触れにくるし、われわれの言葉（パロール）も、返事がそれを証明してくれるように、他者のうちで彼の意味に触れにゆくのだ」（メルロー＝ポンティ、1979、184：下線強調は筆者による）

「われわれは、いずれもが同じ文化的世界に属し、なによりもまず同じ言語体系（ランング）に所属しているかぎり、たがいに侵蝕しあうものだ」（同上、184：下線強調は筆者による）

「私の他者への蚕食、また他者の私への蚕食」（同上、176：下線強調は筆者による）

これらの記述の中で、メルロー＝ポンティは、自らの言葉が他者に伝達されることが成功することとして、言葉が互いの意味に触れ合うこと、侵蝕し合うこと、蚕食すること等の表現をしている。メルロー＝ポンティが、最後の著作である『見えるものと見えないもの』において展開した、いわゆる「肉の現象学」において頻繁に使用していたこれらの用語が、言語に関する思索においても使用されているのである。ここでわれわれは、互いに意思を伝達するとは、言葉のもつ表面的な意味を超えて、さらに内奥のところまで互いに触れ合い、侵蝕し合うことが、すなわち、言語における意思伝達の双方向性がメルロー＝ポンティにより強調されていることに気づくのである。

メルロー＝ポンティはさらに、以下のように述べる。

「言葉（パロール）としての私と言葉（パロール）としての他者とのあいだには、あるいはもっと一般的に表現としての私と表現としての他者とのあいだには、意識相互の関係を敵対関係たらしめるような二者択一はもはや存しない。私は、単に私が語っているときにだけ能動的なのではなく、聴き手のなかでの私の言葉（パロール）に先行しているのだ。私が聴いているときにも、私は受動的ではなく、他者が語ることにならって・・・語っているのである。語るということは単なる私の発意ではないし、聴くということも他人の発意に服することではない。」（同上、190：下線強調は筆者による）

「言葉（パロール）がわれわれに関わり、われわれをはすかいから襲い、われわれを籠絡し、われわれを引きずりこみ、われわれを他者に変え、他者をわれわれに変えるからであり、言葉（パロール）が私と私ならざるものとの境界を廃棄し、私にとって意味をもつものと私にとって無意味（ノン・サンス）なもの、主体としての私と客体としての他者とのあいだの二者択一の関係を消し去るからである」（同上、192：下線強調は筆者による）

すなわち、メルロー＝ポンティは、私が他者に意

思伝達を意図して言葉を語る時の能動性と受動性の二分の在り方が、さらには、私と他者との二分の在り方さえもが、未分化な状態になるとまで記しているのである。こうしたことがいえるのはなぜなのであろうか。メルロー＝ポンティは、さらに以下のように述べる。

「文化の沈殿こそがわれわれの所作やわれわれの言葉（パロール）に自明な基盤を与えているものであるが、なによりもまずこの沈殿が、この所作やこの言葉そのものによって達成されなければならなかった」（同上、185：下線強調は筆者による）

「同じ一つの大地へのわれわれの根づき、同じ一つの自然についてのわれわれの経験こそが、われわれをその企てに投じる当のものだ」（同上、186：下線強調は筆者による）

メルロー＝ポンティは、文化が沈殿することにより自明な基盤が与えられているからこそ、あるいは、同じ一つの大地に根づいているからこそ、共通の基盤であるところの言語世界を持ち合うことができ、言語によるコミュニケーションを成功させることができると述べている。文化の沈殿とは、共通の言語世界に生きるもの同士の間で行われた意思伝達やコミュニケーションにより、語る言葉が語られた言葉として沈殿されることである。これらの言語世界の共通性が高まれば高まるほど、意思伝達やコミュニケーションはより深いレベルで行われるようになり、ある場合には、能動と受動が未分化になるほどの関係の中で、互いを侵蝕し合いながらコミュニケーションが成立し、またそのことが、互いの共通の言語世界をさらに形成することとなるのである。

ここまで考察を進めてきて、メルロー＝ポンティの言語論における、言語の意味について改めて考えることができるようになる。再びメルロー＝ポンティの言を見る。

「言葉（パロール）とは私がもっとも固有なものとして有しているもの、私の生産性ではあるが、にもかかわらずそれは、その生産性によって意味をつくり、それを伝達せんがための生産性でしかないのである」（同上、186：下線強調は筆者による）

メルロー＝ポンティは、言葉のもつ意味の中でも、「伝達」を、すなわち、相手に伝わることを重視していたと考えることができる。だからこそ、語る言葉のうちでもコミュニケーションに成功したもののみが、すなわち、伝わることに成功したもののみが、語られた言葉として沈殿され、共通の基盤としての言語世界が形成され、互いに侵蝕し合うほどまでになる関係が形成されると考えられているのである。

メルロー＝ポンティの言語論に学んだ今、われわれはヨシヒサくんが言葉を発したことの意味をどのようにとらえることができるであろうか。以下、改めて、彼が語った（書いた）言葉について考察を進めてみたい。

Ⅳ　考察

1　言葉の沈殿

筆者との関わりの場面において、ヨシヒサくんは自ら音声による言葉を発することはなかった。したがって、彼が自ら音声による言葉を発することにより、他者との言葉によるコミュニケーションを成功させていたとは考え難い。しかし、2010年の関わりの場面で、彼はワープロソフトを用いてはじめての言葉を出した。さらには、2013年の関わりの場面では、彼は、「ぬく」、「ぬいた」等の言葉を書いた。これらの言葉は、筆者や周りの人たちが言った言葉がそのまま出されたものではなく、また、筆者の予想もしていなかったものであったので、彼が自ら作り、書いたものであることは疑いようがなかった。と同時に、筆者は、この時点で、彼の中に言語世界が形成されていたと考えざるをえなかった。ここで筆者は、彼の中にどのような言語世界が、どのようにして形成されたのかという問題について、考えなければならなくなったのである。

メルロー＝ポンティの言語論から、われわれは、語る言葉のうちコミュニケーションに成功したものが語られた言葉として沈殿され共通の言語世界になるということを学んだ。しかし、この時点まで、彼は音声による言葉を自ら語ってはいない。では、彼は一体何を沈殿させ、何を積み重ね、どのようにしてわれわれと共通の言語世界を形成したのであろうか。

筆者との関わりの場面で、彼は関わり手である筆者や周りで見ている人たちの言葉を聞いてきた。それだけでなく、日常の場面でも、彼は、周りにいる他者の言葉を聞いてきたと考えられる。この時彼

が、言葉を意味のあるものとして聞いていたとしたならば、全く受動的に周りから聞こえてくる言葉に身を任せていたわけではないと考えられる。メルロー＝ポンティが述べたように、「私が聴いているときにも、私は受動的ではなく、他者が語ることにならって・・・語っているのである」（メルロー＝ポンティ、1979、190）、「語るということは単なる私の発意ではないし、聴くということも他人の発意に服することではない」（同上、190）のである。メルロー＝ポンティのこれらの言によるならば、彼は、自ら語りながら周りの他者の言葉を聞いていたということになる。もしそうでなければ、彼がわれわれと共通の言語世界を形成することはなかったであろうし、また、「語る」ことすらなかったであろうと考えられるのである。

語る言葉が沈殿される以前の段階で、すなわち、未だ語ることのできない能力段階において、自らが語る言葉が沈殿されることは考えられない。しかし、他者の言葉を聞く時、さらに、自らも語りながら他者の言葉を聞く時、それらの言葉は沈殿され、言語的世界を形成する基となる。これらを基にして、いよいよ自らが語ることとなるのである。

ここで改めて、2013年の関わりの場面で「ぬく」という言葉を彼が語った（書いた）ことについて考えてみたい。

筆者が、1997年の関わりの場面で彼に四角の枠抜きの教材を呈示して以来、彼は一貫して極めて熱心に枠の中から取っ手を「抜く行為」を繰り返し行ってきた。これらの場面で、筆者は、「抜いて」、「抜こう」、「抜けたね」等々の言葉を彼にかけ続け、それらの言葉を彼は確かに聞いていた。おそらくはそれらの言葉は、彼の中に積み重ねられ、沈殿されていったと考えられる。

先にも見てきたように、メルロー＝ポンティは、「あらゆる表現操作のうちひとり言葉だけが、沈殿作用をおこして一つの相互主観的な獲得物を構成することができる」（メルロー＝ポンティ、1967、311）と述べていた。この言によるならば、言葉を語ることにより、あるいは、言葉が語られるのを自ら語りながら聞くことにより、言葉が沈殿作用をおこし、言語世界を形成すると考えることができる。

筆者と彼との関わりの場面において、枠抜きの教材で「抜く」行為を繰り返し行ってきた場合、「抜く」という言葉が彼の中に積み重ねられたと考えることができる。しかし、筆者は、それのみならず、「抜く行為」そのものも彼の中に積み重なっていたのではないかと考える。なぜならば、「抜く」という言葉が、「抜く行為」と密接に結びついて常に語られていたからである。さらに、語る言葉をもたない段階の彼にとって、筆者からの促しに応じて枠から取っ手を抜くという行為を行うということは、他者とコミュニケーションをとるための一つの表現行為としてとらえることができるからである。もしそうであるならば、「抜く行為」は単なる身体運動ではなく、一つの表現行為として機能し、コミュニケーションの成功をもたらし、「抜く」という言葉と極めて密接に結びついた仕方で、彼の中に沈殿し、われわれと共通の言語世界を形成することとなったのではないかと、筆者は考えたのである。

以上、音声による語る言葉をもたない段階にある彼が、自ら語りながら聞く言葉を、あるいは、抜くという行為そのものを、積み重ね、沈殿させて、自らの言語世界を形成した過程を考えることができた。しかし、彼に対して語りかけられた言葉や、彼が周りの他者のコミュニケーションとして聞いた言葉や、彼自身がおこした行為が、すべて彼の中に沈殿されたわけではないことについて改めて考えなければならない。では、どのような言葉や行為が彼の中に沈殿され、言語的世界を形成していったのであろうか。ここでもやはり、先に述べた、「成功したコミュニケーション」という視点に立って考察を進めていきたい。

2　成功したコミュニケーション

コミュニケーションが成功する時、どのようなことがおこっているのであろうか。まずは、自らが言葉を語ることによりコミュニケーションに参加し、他者との間で意思伝達のし合いに成功する場面を考えることができる。しかし、言葉を自ら語ることができなければ、こうした形での成功を実現することはできない。では、語る言葉を未だもっていない時に、コミュニケーションを成功させることはいかにして可能となるのであろうか。

ここで再び、メルロー＝ポンティの論に学ぶこととしたい。メルロー＝ポンティは、『世界の散文』において、人類が初めて言葉を発した時のことにつ

いて論じている。人類が初めて言葉を発した時、それ以前に言葉を発した者はいなかったのであるから、言葉によるコミュニケーションの成功を経験していた者はいなかった。したがって、他者により発せられた言葉を聞き、あるいはそれらを模倣して言葉を発するということはありえなかった。その状況で言葉はいかにして発せられたのであろうか。

メルロー＝ポンティは、「コミュニケーション以前にすでにコミュニケーションの原理が与えられていた」（メルロー＝ポンティ、1979、64）、「最初の言葉（パロール）も、コミュニケーションの無のなかで起ったのではない」（同上、64）、さらに、「なぜなら、それは、すでに多くの人に共通した行為から生れ、すでに私的世界であることを止めた感覚的世界に根を下していたからである」（同上、64）と述べている。

メルロー＝ポンティのこれらの言によるならば、人が言葉を語る時、既にコミュニケーションの原理が与えられているのであり、いわば、コミュニケーションが成立しうる共通の世界を生きていることになる。このような世界を生きることができているのはなぜなのであろうか。筆者は、言葉を語る前の段階において、既にコミュニケーションに成功した経験をしていたからではないかと考える。

彼が言葉を語りかけられた時、それらが単なる音であったならば、コミュニケーションは成功しない。それらが、人間の声となり、さらに、意味のある言葉となり、自らが語りながら聞くという段階になると、言葉によるコミュニケーションは成功し、共通の言語世界を形成するに至る。自らが言葉を語る以前の段階でこれらのことが既におこっているからこそ、自ら言葉を語ることができるようになるのである。さらに、自らに言葉が語りかけられる場合ばかりではなく、他者同士の言葉の交わし合いを見て聞いている場合も、コミュニケーションの原理が与えられる機会になる。すなわち、他者同士の間でコミュニケーションが成功した場面を見ることも、コミュニケーションが成功するということを、あるいは、成功したらどのようなことが生じるかということを知る機会になるのである。以上のように、他者の言葉を聞くことにより、また、他者のコミュニケーションの場を見ることにより、言葉を語る以前の段階においてコミュニケーションの原理が与えられ、コミュニケーションが成立しうる共通の世界を生きることができるようになるのである。

ここでさらに、「抜く行為」もまた、コミュニケーションの成功をもたらしていたということについて改めて考えてみたい。抜くという行為が沈殿されていたのであるならば、少なくとも何らかのコミュニケーションが成功していなければならない。抜くという行為が何を伝達し合うことになり、何をもってコミュニケーションが成功したといえるのであろうか。

四角、あるいは三角の枠抜きという教材で枠から取っ手を抜くという行為を行う場合、筆者が教材を彼の前に呈示し、「抜いてください」と言うことから始まる。決して、彼が自ら教材の前に行き、取っ手をつかんで抜き取ることを始めるわけではない。筆者の呈示と促しに応じて、彼は取っ手をつかみ枠に沿って動かし抜き取り口の穴の所から抜き取ろうとし、実際に、取っ手が抜き取られた時、筆者や周りで見ている人は、「抜けたね」、「すごいね」等の言葉をかけて彼の行為に応じるのである。

この過程を改めて見てみると、彼の「抜く行為」は、一つの行為として他から独立しておこっているのではないことに気づくことができる。筆者と彼とが、あるいは周りで見ている人と彼とが、彼の「抜く」という行為をはさんでコミュニケーションを成立させていたのである。筆者が枠抜きの教材を呈示し、彼がそれに応えて抜くという行為を行ったことにより、筆者と彼は抜くという行為を共有することとなった、すなわち、共通の世界を生きることとなったのである。特に、語る言葉をもたなかった段階の彼は、抜くという行為を筆者と共通のものとして世界を形成し、この世界を基にして「ぬく」という言葉を成立させた。さらにいうならば、筆者と彼との間で、抜くという行為を共有し、互いに共通の世界を形成していたからこそ、「ぬく」という言葉は、筆者と彼との間で、互いの世界を侵蝕し合うほどの言葉となったのである。彼が、「ぬく」という言葉を語るに至った過程において、実際に抜くという行為を重ねてきたことが、さらには、それを沈殿させ、筆者と共通の世界を形成していたことが明らかとなった。「抜く」という行為によりコミュニケーションが成功し、筆者との共通の世界が形成されたからこそ、彼は「ぬく」という言葉を語ることができ、その結果、筆者と彼は互いの世界を侵蝕するほ

どのコミュニケーションを成功させるに至ったのである。

以上、彼が語る言葉を未だもっていない時、言葉を自ら語りながら聞くことにより、さらには、他者と共有できる行為を積み重ねることにより、コミュニケーションを成功させ、共通の世界を形成していたことについて考察してきた。以下、彼にとっての言葉を語ることの意味について、さらに考察を進めていきたい。

3　言葉を語ることの意味

2010年の関わりの場面で、彼は、ワープロソフトではじめて言葉を作り、次第に、ひらがなの文字を書いて言葉を作るようになった（注６）。それぞれの言葉は、筆者の問いかけに応えるという仕方ではあるものの、彼が自ら作り出した、すなわち語った言葉であり、彼の考えや気持ちを示すものとして筆者が充分に納得できるものであった。

では、彼はなぜ、必ずしも自由には動かない身体を懸命に動かしてまで言葉を語ろうとしたのであろうか。この問題について、改めて考えてみたい。

彼が言葉を語ろうとした理由の一つとして、彼が、語る言葉をもつ前の段階で、先に述べたような仕方で様々なコミュニケーションの成功を経験し、言葉を語るための準備が充分にできていたことを挙げることができる。確かに、こうした準備が整っていなければ、彼は言葉を作り書き、語ることはできなかったであろうし、語ろうとすることすらできなかったであろう。つまり、彼は言葉を語る能力をもっていたということが、彼が言葉を語ることができる理由の一つとして挙げられる。しかし、準備ができていたことが、あるいは能力を備えていたことが、彼が言葉を語ろうとした最大の理由なのであろうか。

ここで彼により語られた言葉を改めて考えてみたい。特に2013年に彼が書くことによって自らの意志や考えを示した場面について考えてみたい。

２年ぶりに行うことのできた関わりの場面で、枠抜きの教材を行ったことに対する感想を求められた時、彼は、「ぬいた　ひさしぶり　うれしい」と自らの言葉を書くことにより語った。筆者との関わり自体が久しぶりのことであり、この言葉を、長期入院を経て、教材に対して自らの身体運動をおこすという活動を再びできるようになったことの喜びが表現されているものであると筆者はとらえた。彼は、この気持ちを、関わりの相手である筆者に、また、周りで見ている人たちに対して示すために、懸命に自らの身体を動かしてこれらの文字を書き言葉を語ったのである。

筆者が、「次に何をやりますか」と問うた時、彼は、「ぬく」と自らの言葉を書いた。これは、筆者に明確に向けられた言葉となっていた。枠抜きの教材を再度行いたいという自身の強い意志を示し、他ならぬ筆者に対してそれを訴えるかのように、これも懸命に身体を動かして書いたのである。

最後に今日の感想を求めた時、彼は、「しあわです　またやる」と自らの言葉を書いた。今日の関わりをもてたことが幸せであったという自らの気持ちを示し、さらに、「またやる」という、関わりに対する強い意志を示したのである。この言葉を書いている最中、筆者は疲れているであろう彼を気遣い、書くことを終わりにしようと何度も提案したのであるが、彼は、筆者の働きかけを振り切るように、疲れているから余計に自由には動きにくくなっているであろう自らの身体を懸命に動かして、「またやる」と最後まで書ききったのである。「またやる」という言葉もまた、こうした場面をまた行いたいという意志を示し、関わりの相手である筆者に明確に向けられた言葉であった。

以上のように見てくると、この日に彼の語った言葉の多くは、関わりの相手である筆者に向けられたものであり、あるいは、周りで見ている人たちに対して向けられたものでもあったことがわかる。彼が、必ずしも自由には動かすことのできない身体を懸命に動かしてまで言葉を出したことの意味は、このことにあると筆者は考える。

先述したメルロー＝ポンティの言語論から、われわれは、言葉のもつ意味のうち、「伝達」を重視することを学んだ。言葉を語ることが他者に「伝達」するという意味を持つことについて、改めて考えなければならない。

彼は他者に伝えるために言葉を語った。その方法が、彼の場合、書くという行為によるものであった。彼は言葉を語ることにより何を伝達しようとしたのであろうか。彼は、「ぬく」、「またやりたい」という、自身の意志を伝達したかったのだと筆者は考えた。「ぬく」という言葉により彼の意志を伝え

られた筆者は、その意志に応え、枠抜きの教材を呈示し、彼に取っ手を抜く行為を行うよう促した。彼は、取っ手をつかみ枠から抜き取るという行為を再び行うことができた。つまり、彼は、「抜く」という自らの意志を関わりの相手である筆者に伝えようとし、実際に意志を伝えることに成功したのである。

彼は、伝えるべきものを、すなわち「抜きたい」、「やりたい」という意志をもっており、さらに、それを伝えるべき相手を、すなわち、関わりの相手である筆者をもっていたのである。伝えるべき自身の意志を実現するために必要な他者に対して言葉を語ったのである。彼が言葉を語った理由として、このことも極めて重要なこととして挙げなければならない。伝えるべきものがあり、それを伝えるべき相手がいるということが、言葉を語る時には極めて重要なことなのである。

以上、彼にとっての言葉を語ることの意味について考察してきた。われわれは、ここで、言葉を語ることを、能力の問題としてのみならず、意志の問題としてとらえ直すことの重要性について考察してきたのである。これらのことを踏まえて、論の最後に、彼との関わりを作っていくために、関わり手として特に意識すべき事柄について述べておきたい。

おわりに

ヨシヒサくんとの関わりの場面を通して、言葉を語ることの意味について、メルロー＝ポンティの言語論に学びながら考察を進めてきた。彼は、今後も、様々な仕方でコミュニケーションを成功させながら、語られた言葉を沈殿させ、自らの言語世界をより豊かなものとして形成していくことであろう。そのために、関わりの相手であるところの筆者は、成功したコミュニケーションの相手となるべき責務を負うこととなる。言葉を語りはじめた彼に対して、筆者もまた言葉で語り、また彼の言葉を聞き、よりよい仕方でのコミュニケーションをはからなければならない。そのことが彼の言語世界をより豊かなものとすることになるからである。しかし、語る言葉をもつ以前の彼が示していたように、コミュニケーションは言葉を語ることによってしか成功するものではない。言葉を語るだけでなく、「取っ手をつかんで抜く」という行為を共有することや、自らも語りながら他者の言葉を聞くことなどにより、コミュニケーションは成功し、それらは彼の中に沈殿され、共通の言語世界を形成する。言葉を語りはじめた彼と相対する時、言葉にのみ依ってしまうことも考えられる。しかし、彼が、言葉を語る前に彼自身が豊かに他者と共通の世界を形成したように、言葉に依らないコミュニケーションをもさらに豊かなものにしていかなければならないのである。言葉について彼に学んだ今、言葉が出せるかどうかという視点からのみとらえるのではなく、彼にとっての伝えるべきものは何であるか、それを関わり手として共有できているかという視点から、改めて考えなければならない。よりよい形でのコミュニケーションを成功させることにより、彼の言語世界をより豊かなものとし、それを共有するよう努めることが筆者に課せられた課題なのである。

注

1　ヨシヒサくんとの1992年の出会いから約10年間に渡る関わりについては、下記の論文に詳述した。
2004　遠藤司 「世界の拡がりを空間という視点から考える――一人の重障児との関わりを通してー」（『駒澤大学教育学研究論集』第20号 pp.29-66）

2　関わりの場面でのヨシヒサくんと筆者との行動等を記述する際、本論文では筆者のことを“私”と表記することとする。なぜならば、関わりの場面で、筆者は論文の書き手として彼と出会っているわけではなく、関わり手であるところの“私”として出会っているのであり、関わりの場面をできる限りそのままに記述しようとするならば、“私”という表記を用いるのが適切であると考えるからである。

3　私との関わりの場面では、言葉の学習を体系的に行うことはしてこなかったが、彼が家にいる時等に、お母様と言葉をテーマとして過ごすことはあった。こうしたことも彼の言葉の世界を広げることに当然つながっていたであろうし、彼が私との関わりの場面でワープロソフトを用いて言葉を作ったことにつながっていたと考えられる。

4　2010年８月の関わりで、私は彼にワープロソフ

トを用いて行や文字を一つずつ呈示し、彼が選択したかどうかを彼の表情や身体の動きから見てとることを繰り返した。彼はまず、「なかいちばん」という言葉を選び作った。私や、周りで見ている人、特にお母様は、「今年の夏が極めて暑い日が続いたため、彼が家の中で過ごすことが多く、酷暑の外に比べ家の中で過ごすことが一番よいという意味の言葉を作ったのではないか」と解釈した。そのように解釈したことを彼に伝え、さらに言葉を促したところ、次には「そとゆるせ」という言葉を選び作った。周りの話を受けて、酷暑の外に出るのは許してほしいという意味の言葉として周りは受け止めた。この一連のやりとりを見て、筆者は、彼が言葉の世界を生きていることを確信し、また、周りの話を聞きながら自らの言葉を出すことができていることをもまた確信することができた。この後私は、関わりの中で、彼の言葉を出すための環境を整えることに努めることとなったのである。

5 「メルロー＝ポンティ」の日本語表記については、「メルロー＝ポンティ」とあらわしたり、「メルロ＝ポンティ」とあらわしたりするなど、必ずしも統一されていない。本論文では、『知覚の現象学』日本語訳にしたがい、「メルロー＝ポンティ」という表記に統一することとする。

6 2010年の関わりの場面で、ヨシヒサくんは初めてワープロソフトを用いて自らの言葉を作った（語った）。彼のこの姿を間近で見た私は、彼がこの後もワープロソフトを用いながら言葉を作るのではないかと期待した。しかし、2011年の関わりの場面では、ワープロソフトを用いて文字を呈示しつつ彼に問いかけても、彼はほとんど応えようとすることはなく、言葉を作ることもなかった。この後彼は、むしろ、ペンで紙に文字を書くことを好んで行うようになり、2013年の関わりの場面では、明確に自らの言葉を書くことにより語るようになったのである。この間、筆者は、ワープロソフトで文字を呈示することも並行して行ってはいたのであるが、彼はやはり、それに対して明確に応えることはほとんどなかった。このことについて、筆者は、ワープロソフトを用いて言葉を出した彼の姿を間近で見ていただけに、それをしなくなったことについて、少なからぬ戸惑いを覚えた。と同時に、もし彼が、ワープロソフトを用いて言葉を作ることと比して、文字を書くことにより言葉を出すことを好むようになったとしたならば、その理由は何なのかを考えなければならなくなった。まず筆者は、呈示された文字に対して応えるという仕方で文字を選び言葉を作るというワープロソフトでの方法に比して、筆者に支えられながらではあるものの、自らペンを持ち文字を書くことの方が、より直接的に自らの考えや思いを表現できると彼がとらえたからではないかと考えた。2011年、あるいは2013年の関わりの場面での、文字を書いている時の彼の懸命な表情や姿を見ると、自ら言葉を語っているという実感を確実に得ているのではないかと筆者は考えたのである。彼の現在の身体の状況では、文字を書くという身体運動をおこすことは、いかなる姿勢においても大きな負担を課すことになる。それに比して、ワープロソフトで彼が表情を変えたり少し身体を動かしたりすることで文字を選ぶことが成立するならば、こちらの方法の方がより適切であるという考え方も充分に成り立つ。しかし、もし彼が、言葉を語ることを実感しつつ自らの言葉を語りたいと考えているのならば、その考えや思いを尊重することも、関わり手としてしなければならないことである。ワープロソフトを用いて文字を選ぶことにより言葉を語ることと、文字を書くことにより言葉を語ることの両者の意味について考えながら彼との関わりの場面を作っていくことは、関わり手としての筆者の今後の責務である。

引用文献

河野哲也　2000 『メルロ＝ポンティの意味論』 創文社
メルロー＝ポンティ、M. 1967『知覚の現象学１』（竹内芳郎、小木貞孝訳）みすず書房
メルロ＝ポンティ、M. 1979『世界の散文』（滝浦静雄、木田元訳）みすず書房